

優れた芸術の魅力を伝えるとともに、独自のコレクションを後世に伝える

要求水準－収集・保存

収集方針に基づき資料を収集し、適切な保存・管理を行う

評価項目

- (1) 本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める
- (2) 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

状況説明

- (1) 本県出身の作家を中心として、特色ある資料の充実に努める
 - ・河田小龍をはじめ、広瀬東畝等の作品 47 点(評価額 14,355 千円)の寄贈を受けた。
- (2) 資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う
 - ・美術作品・資料は、収蔵庫に保管し、24 時間空調による温湿度管理の下で適正に保存管理するとともに、震災時に作品がそのまま落下しないよう耐震化対策を取っている。
 - ・展覧会に出品する作品のコンディション・チェックを行い、状態に合わせた適切な対応を行っている。
 - ・石元泰博フォトセンターは、展示室入り口に受付スタッフを配置するとともに、監視カメラで常時展示室を監視。プリントは収蔵庫に、フィルムはフィルム保管庫に、それぞれの素材に適した温湿度設定がなされた環境下で保存。また、石元氏の旧蔵カメラといった資料類の収蔵位置を見直し、収蔵庫からフィルム保管庫に移動させる整理作業を行った。
 - ・展示室は 24 時間監視カメラ及び警報システムによる警備を行い、展示室入り口には受付スタッフ及び監視員を配置し、展示作品の安全を保っている。
 - ・IPM の一環として、展示室内で虫など生物が見つかった場合は、その発生状況を記録するとともに、隣接する部屋の一斉清掃を行い、展示環境の向上・美化に努めた。
 - ・書庫・アート情報コーナーでは、県内外の美術館・博物館等が発行する年間スケジュールや図録を整理・公開するとともに、開催中のコレクション展や企画展の作家や内容に関連した図書類の特集コーナーを設置するほか、整理を終えた石元泰博作品の画像を設置した端末 PC で公開している。
 - ・絵具層の剥落など劣化が進行している大型作品を含む 14 点の収蔵品を、県内外の専門業者に委託して修復し、作品コンディションの安定化を図った。
 - ・職員(学芸員)が IPM コーディネーター資格や虫菌害防除作業主任者資格を取得し、IPM に関する専門知識の向上に努めたほか、職員が全国美術館会議の保存研究部会や九州国立博物館の IPM 研修に参加し、最先端の事例を学び、その成果を業務に取り入れるよう努めた。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に則り、本県ゆかりの作家の代表的作品を数多く収集することができている。 ・収蔵庫の保存環境保全に努め、適切な方法で収蔵資料を保管するとともに防犯セキュリティ面でも収蔵庫、展示室等の安全を保っている。

要求水準－調査・研究

収蔵資料の調査研究を進め、その成果を公開する

評価項目

- (1) 職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する
- (2) 石元泰博コレクションの調査・研究を進め、適切な利活用を図る

状況説明

(1) 職員の専門性の向上を図るとともに、調査研究の成果を、資料の公開や図録・記録集の作成等により、広く発信する

- ・各学芸員が全国美術館会議の保存研究部会、教育普及部会、地域美術研究部会、情報資料研究部会、美術館運営制度研究部会にメンバーとして参加したほか、美術館連絡協議会、四国美術館会議、明治維新 150 年高知ミュージアム連絡協議会、せとうち美術館ネットワーク等の大会や部会、ワークショップ等に参加し、専門性を向上させた。
- ・高知大学と連携し、教員及び学生を対象に「スタディ・ツアー」としてギャラリートークを行った。
- ・ホール担当職員が、インドネシアで開催された現代パフォーマンスアート・フェスティバルや全国コミュニティシネマ会議 2018 に出席し専門性を向上させた。
- ・コレクション・テーマ展「土陽美術会」で明らかになった研究成果について、担当学芸員が明治美術学会例会で発表を行い、全国の明治美術研究者へ情報発信を行ったほか、幕末維新博に合わせて絵金作品の解説付きデジタルコンテンツを制作し、日常的に公開の難しい作品へのアクセスを向上させた。
- ・高崎元尚、石元泰博、中山高陽、山脇信徳ら高知ゆかりの作家の作品、資料に関する論文、研究ノート等計 4 本を掲載した『高知県立美術館研究紀要第 9 集』を刊行した。同時に Web サイト上で PDF の公開も行った。
- ・2か月にわたり開催した高知サマープロジェクト 2018 「MΩCHI SCRAMBLE(モチΩスクランブル)の記録集を発行し、関係各所に配布した。
- ・アーティスト・イン・レジデンス 2018「ランダール&サイトル」では、スウェーデンと英国を拠点とするユニット「ランダール&サイトル」が、約 1 か月高知に滞在し、県内をリサーチしながら地域住民らと作品を創作し、開館記念日に披露した事業の経過や成果を報告書としてとりまとめ、全国に配布した。

(2) 石元泰博コレクションの調査・研究を進め、適切な利活用を図る

石元泰博フォトセンター設立より 6 年目を迎え、「深める(保存管理、調査研究、収集)」、「広める(展示公開、著作権管理)」、「つなぐ(教育・普及)」の活動を展開した。

① 「深める」活動

- ・複写後のプリント作品情報のデータ入力の実施(レコード数 34,753 件、進捗率 100%)、高精彩プリント作品の複写(1,431 枚)、保管庫で管理しているフィルム 1,679 スリーブのデジタル化・データベース化し、その内容は外部研究者に一部公開した。
- ・寄贈資料(小物類、調度品など)や遺族より借用した資料の内容確認と調査を進め、コレクション展での展示公開や外部研究者への調査協力を行った。
- ・滋賀県立大学、香川県立ミュージアム、ラ・バル、ランダール&サイトルほか、研究者、学芸員、アーティスト等へ石元コレクションやフォトセンター施設の公開などの調査協力を行うとともに、意見交換を通じてネットワーク構築を図った。
- ・シカゴ歴史博物館、シカゴ建築財団の協力のもと、被写体となった建築物の特定などの調査を行った。
- ・石元作品が掲載された写真集等、貴重書を含む関連書籍の収集を行った。
- ・日本カメラ博物館と東京都写真美術館の附属図書館にて写真雑誌の調査を行い、その成果を研究紀要に掲載した。

② 「広める」活動

- ・コレクション展として、「国東紀行」、「HANA」、「シカゴ建築」をテーマに、前後期で展示替えを行い、計6

- 回合計 192 点の作品及び関連資料を紹介した、また、コレクション・テーマ展として、「石元泰博写真展 建築家・磯崎新、内藤廣の仕事」を開催し、磯崎新氏、内藤廣氏をはじめ日本を代表する建築家たちの作品を写した建築写真 140 点のほか、関連する写真集や大判サイズのフィルムなどを展示した。
- ・京都府京都文化博物館に作品 56 点、資料 4 点、森美術館に作品 16 点を貸出した。
 - ・展覧会等の調査協力として、京都府京都文化博物館、森美術館から調査を受け入れた。
 - ・著作権の利活用取扱業務として、国内外からの相談など 37 件に対応し、30 件の利用につなげた。

③ 「つなぐ」活動

- ・「スクール・プログラム」の一環として、土佐市の高岡第二小学校及び波介小学校を対象に、学芸員による事前授業を行ったうえで、チャーターバスで当館へ招待し、作品の鑑賞を行った。また、高知市立城西中学校にて、新規プログラムによる出前授業を行った。
- ・土佐市の地域祭「山の手ふれあいフェスティバル」にブース出展し、スライドショーやゲーム等を通じてフォトセンターの広報活動を行った。
- ・高知市立一宮中学校の「校内ハローワーク」にてレクチャーを行い、フォトセンターについて紹介した。
- ・日本写真学会会報誌、高知市文化振興事業団広報誌へ寄稿を行った。
- ・専用ウェブサイトと SNS において、各コレクション展の情報発信のほか、ウェブギャラリーでの作品画像公開、コラム掲載などを行った。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・調査研究の成果としての企画展やコレクション展の開催、研究紀要の発行等、様々な取り組みを継続して実施することができている。 ・ホール事業では、担当者の専門性の向上を図っており、また海外アーティストのレジデンス招聘や交流など活発な活動につながっている。 ・石元泰博フォトセンターでは、コレクション作品の調査研究を進めているほか、氏の故郷である土佐市の教育委員会と連携し、子どもたちが作品の魅力と郷土の偉人について学ぶ機会を提供するとともに、作品の借用申請等を通じて国内外の美術館等と連携を深め、作品を広く紹介するなど、情報発信と利活用促進の活動ができている。

要求水準－展示・公開

質の高い、優れた芸術に触れる機会を提供し、芸術や文化に対する関心を深める

評価項目

- (1) 世界有数のシャガールコレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で25万人以上の観覧者を目指す
- (2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める
- (3) 講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

状況説明

- (1) 世界有数のシャガールコレクションの展示など、質の高い魅力的な常設展・企画展を開催し、5年間で25万人以上の観覧者を目指す
- ① シャガール・コレクション展
 - ・コレクションから、故郷や動物、音楽、恋人などシャガールが繰り返し描いたモチーフを「シャガールのお気に入り」というテーマで、単品版画を中心に6回に分けて紹介した(総出品数 202 点)。
 - ② 石元泰博・コレクション展
 - ・コレクションから、「国東紀行」、「HANA」、「シカゴ建築」をテーマに、石仏、花、建築といった対象をとらえた多様な石元作品を6回に分けて紹介した(総出品数 192 点)。
 - ③ コレクション・テーマ展
 - ・ドイツ表現主義の版画(総出品数 140 点)。
 - ・「土陽美術会」(総出品数 61 点)。
 - ・「石元泰博写真展 建築家・磯崎新、内藤廣の仕事」(総出品数 154 点)。
 - ④ 「石川直樹 この星の光の地図を写す」《巡回展》(総出品数約 400 点)
 - ・世界をフィールドに活躍する写真家、石川直樹の作品を石川による文章や実際の旅で用いた道具類を交えて総合的に紹介した。
 - ⑤ 「横浜美術館コレクション 王様の美術館」《自主企画展》(総出品数 114 点)
 - ・横浜美術館との連携企画で、同館のコレクションのフランス近代絵画の名品に加え、ダリの三連画の超大作をはじめ、シュルレアリスムの代表的な作品などを紹介した。
 - ⑥ 「芳年 激動の時代を生き抜いた鬼才浮世絵師」《巡回展》(総出品数 263 点)
 - ・幕末維新の激動の時代を駆け抜けた浮世絵の鬼才、月岡芳年の多彩な全貌を世界屈指の芳年コレクションである西井正氣氏の所蔵品から紹介した。
 - ⑦ 「ニュー・ペインティングの時代」《自主企画展》(総出品数 19 点)
 - ・国内最良ともいわれる「ニュー・ペインティング」コレクションから、世界的にも評価が高く、人気のあるバスキアやキーファー、リヒターなど、巨大でまとめて展示する機会の少ない作品を紹介した。
- (2) ホールの特性を生かした事業を実施し、美術館の魅力向上に努める
- ① 向井山朋子「HOME」 香南市赤岡町 18 公演
 - ・「赤れんが商家」を会場として借り、約 3 週間滞在し、密度の高い観劇を体験できる作品として上演。
 - ② 日本・オランダ国際共同製作「雅歌」 美術館中庭 2 公演
 - ・オランダを拠点に国内外で活躍の場を広げるピアニスト向井山朋子がコンセプトと演出を務め、日本の儀式をモチーフとした作品を国際共同製作し、日本初演を行った。
 - ③ 東京ゲゲゲイ「東京ゲゲゲイ歌劇団 Vol.Ⅲ」 1 公演
 - ・ダンスと音楽を駆使しオリジナル表現を切り拓くアーティスト集団「東京ゲゲゲイ」の新作公演を開催
 - ④ アーティスト・イン・レジデンス 2018「ランダール&サイトル」(スウェーデン) 20 公演
 - ・スウェーデンと英国を拠点とするユニット「ランダール&サイトル」を招聘し、1 カ月間高知で滞在制作を行い、所蔵作品や地域でのリサーチにもとづいた体験型ミュージアムツアーとして完成させた作品。
 - ⑤ 地域のアトリエ「#01 老いと演劇『OiBokkeShi』」美術館ホール、講義室 3 日間
 - ・美術館をアトリエに見立て、地域のアーティストと観客が次世代のアートの可能性を考察するセミナーと

して、認知症の介護現場に演劇の手法を取り入れた介護劇の公演、ワークショップ及びトークを実施

⑥池川神楽を舞う

⑦定期上映会(秋冬)4日間計24本上映

(3)講演会やギャラリートークの実施など、来館者の芸術や文化への理解を深めるためのサービスを充実させる

- ・研究者、美術館関係者を招聘し講演会、レクチャー、ギャラリートーク、ワークショップ等を開催した。
- ・シャガール・コレクション展では毎週土・日曜日に、解説補助員による作家解説を主体としたミニ・トークを実施。コレクション・テーマ展では毎週土曜日、企画展では日曜日に、各展覧会の担当学芸員がギャラリートークを実施した(総回数 95 回、総参加者数 1,039 人)
- ・「石川直樹 この星の光の地図を写す」では、石川直樹氏自身によるギャラリートークも企画。
- ・「横浜美術館コレクション 王様の美術館」では、巨匠たちの作品を、年代を追ってわかりやすく解説。
- ・「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」では、本展コレクター・日本画家、西井正氣氏による記念ギャラリートークも企画するなか、幕末維新博と連携して、歴史や文化的な背景を盛り込み解説した。
- ・「ニュー・ペインティングの時代」では、高知中央高等学校の協力のもと、放送部学生の解説ナレーションによる音声ガイドを制作し、無料で貸し出しを行った。
- ・「石川直樹 この星の光の地図を写す」では、石川直樹氏によるヒマラヤトレッキング報告会を開催。
- ・「横浜美術館コレクション 王様の美術館」では、横浜美術館館長、逢坂恵理子氏と当館館長による記念座談会、横浜美術館主任学芸員、中村尚明氏による記念講演会を開催した。
- ・「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」では、高知大学非常勤講師、中村茂生氏によるレクチャーを開催した。
- ・「ニュー・ペインティングの時代」では、愛知県立芸術大学客員教授・美術批評家、馬場駿吉氏による記念講演会を開催した。
- ・「雅歌」では、ワークショップ型オーディションに県在住または縁のある幅広い年齢層が参加し、起用した4名が作品の音楽的演出を補う役割を担った。
- ・「地域のアトリエ」#00 では、来館者とアーティスト、学芸員が完全無言で語る「筆談会」を実施した。
- ・「地域のアトリエ」#01 では、1日目の演劇公演の終演後にアフタートークを実施した。
- ・アーティスト・イン・レジデンス「ランダール & サイトル」では、高知市内のアートスペースにて滞在制作の経過報告会を行い、地域住民とアーティストの交流を深めた。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none">・企画展、コレクション展などは、他館との連携企画や、「志国高知幕末維新博」の開催にあわせたもの、また、館の二大コレクションを広く発信するものなど多彩な構成となっている。企画展やホール公演と連動した講演会、ワークショップやギャラリートークなどイベントの多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。・世界の舞台芸術の招聘や情報発信、アーティスト・イン・レジデンス事業を通じたアーティストと県民の交流など美術館ホールが長年の活動で培ってきた成果が表れている。

要求水準－教育・普及

様々な年代を対象とした教育・普及活動を行う

評価項目

- (1) 学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
- (2) 幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する

状況説明

- (1)学校や関係機関と連携を図り、子どもたちの芸術や文化に触れる機会を充実させる
学校と美術館が連携して行う事業「スクール・プログラム」を展開するとともに、成果を報告書として発行
- ・団体利用(合計 30 校 1,035 人、12 園 216 人)「高知県美術教育総合展」や「こども県展」に来館する学校への声掛けにより、展示と合わせてプログラムを利用する学校が増加。
 - ・ミュージアムバスツアー(4 校 259 人)
 - ・石元フォトセンター事業(2 校 31 人)
 - ・出前びじゅつ講座(7 校 565 人)
 - ・石元フォトセンター事業では来館前の事前学習として本講座を利用。(2 校 29 人)
 - ・出前クラシック教室(6 校 417 人)
 - ・出前演劇教室(3 校 84 人)
 - ・ティーチャーズ・デイ(3 回実施)
- (2)幅広い年代の方に、芸術や文化に親しむ機会を提供する
- ・中学校の職場体験学習(合計 5 人)
 - ・高知医療学院との連携により、企画展「横浜美術館コレクション 王様の美術館」(学生 55 人)、「地域のアトリエ #01 老いと演劇「OiBokkeShi」上映会＋公開ワークショップ」(学生 57 人)を鑑賞
 - ・学芸員資格取得のための博物館実習(大学生 1 人)
 - ・企業実習生(大学生 4 名)
 - ・四国学院大学からアートマネジメント講座 2018 の受講生 6 人の制作実地研修を「雅歌」公演において受け入れた。
 - ・高知中央高等学校と連携し、高校生による「ニュー・ペインティングの時代」展の音声ガイドを制作。
 - ・高知サマープロジェクト 2018 「MΩCHI SCRAMBLE(モチΩスクランブル)」
 - ・長期間のワークショップ、公開・滞在制作、公開ミーティングなど、これまでの美術館の時間や場の使い方ではできなかったタイプの事業を夏休み限定で立ち上げ。佐川町在住のアーティストユニット、KOSUGE1-16 による「餅まき」をテーマとした交流プロジェクト「MΩCHI SCRAMBLE(モチΩスクランブル)」を開催した。(入場者: 展覧会 9,246 人、関連イベント 696 人)。
 - ・開館記念日イベント(11 月 3、4 日)(入場者 8,980 人)。
 - ・祝祭、防災、野菜の「サイ」に因んだイベントを企画し、すべて無料公開
 - ・お正月イベント(1 月 2、3 日)
 - ・琴やフルートなど、和洋楽器のコラボによる新春演奏会や、仁淀川町池川土居地区に伝わる「池川神楽」をホール能楽堂で無料上演し、様々な年齢層から好評を得た。
 - ・企画展関連イベントでは、講師を招聘して行うワークショップ、アーティストトーク、関連映画上映会等を開催した。
 - ・ホール事業関連イベントとして、地域のアトリエにおいて、コレクション・テーマ展に関連した「筆談会」を

行った。

- ・県民ギャラリー、美術館ホール等の貸出し
(県民ギャラリー・企画展示室:29件、美術館ホール:147件)。
- ・乳幼児を抱えた方々が安心してゆっくりと美術館で鑑賞・観覧できるよう、各企画展、ホール公演時に有資格者による無料の託児サービスを実施した。
- ・資料の整理や発送をはじめ、イベント、団体対応、ミュージアム・クルーズなど、多様な活動をカルチャーサポーターと協働して円滑に進めた。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none">・スクール・プログラムを継続的に実施し、子どもたちが芸術や文化に触れる機会を創出している。・幅広い層の利用者ニーズに合う企画展や公演、その他事業を創意工夫して企画し、県内外から新しい来場者層の獲得を図っている。・開館記念日、お正月のイベントを充実することにより、幅広い層に対して美術館に親しんでもらう機会を提供出来ている。・カルチャーサポーターと協働して活動を行い、芸術や文化に親しむ機会を提供するとともに、県民の美術館への理解を深めるよう努力している。

評価項目

美術館活動に関する戦略的な情報発信により、県内外に館の魅力を広める

状況説明

- ・広報部会へ企画展担当者以外の各部署職員も参加し、企画展ごとにターゲットを定めた、より効果的な広報戦略を行った。
- ・フェイスブック、ツイッター、インスタグラム、メールマガジン等、伝達の早い SNS を積極的に活用した。
- ・新聞、情報誌、WEB 媒体等、県内外のマスコミ等に展覧会やホール事業の開催情報を速やかに提供し、記事の掲載につなげた。
- ・「年間スケジュール」は、各事業のヴィジュアルを使用しながら、デザインに工夫を凝らして作成した。
- ・定期刊行物「ケンビレター」は、展覧会やホール公演の見どころや開催までのエピソード等を盛り込み、事業や美術館に興味を持てる内容になるよう工夫した。
- ・シャガールと石元泰博のコレクション展を紹介するリーフレットは、様式デザインを「対」にすることで、二大コレクションのイメージを強く打ち出した。
- ・ホームページの機能を充実させるとともに、英語ページのサイトを追加して、外国人向けに展覧会や舞台公演などの情報を随時発信している。
- ・各事業での重点的な取り組み
 - ①企画展「石川直樹 この星の光の地図を写す」では子ども向けチラシを別途作成し、小学校に配布し、ファミリー層を含む全世代にアピールした。
 - ②企画展「横浜美術館コレクション 王様の美術館」では、日仏協会会員への広報、夏休み・よさこい期間に合わせて市内ホテルに割引チラシを配布した。
 - ③企画展「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」では、四国の JR 駅でのポスター掲示、クルーズ客船入港時の高知新港観光案内所でのチラシ配布など観光客をターゲットに広報を展開した。
 - ④企画展「ニュー・ペインティングの時代」では、近年人気の作家の作品を印刷物に使用し、NHK「日曜美術館」のアートシーン、「美術手帳」や Web 媒体などで取り上げられ、全国的な広報効果を獲得した。
 - ⑤「HOME」では、会場の周辺地域に積極的に広報物の配布を行い、口コミ効果を高めた。
 - ⑥「雅歌」では、ワークショップ型オーディションの告知も兼ねて SNS の有料広告を行い、また、国際共同制作であることから、連携先のオランダや東京にホール事業の活動を広く周知できた。
 - ⑦東京ゲゲゲイ公演「東京ゲゲゲイ歌劇団 Vol.Ⅲ」では、ツイッターや YouTube などの SNS を中心とした広報により、若年層を中心に早い段階で周知が行き渡り、チケットが即完売となった。
 - ⑧アーティスト・イン・レジデンス「ランダーン & サイトル」では、開館記念日イベントに成果発表を行い、改めて本事業を周知することができた。
 - ⑨「地域のアトリエ」では、劇団 OiBokkeShi のイメージに合うオリジナルイラストを使用したチラシ兼ポスターを作成し、配布した。
- ・25周年開館記念日イベントでは、「サイ(祭、防災、野菜)」というテーマを定め、プログラムを充実させるとともに、アートを通じた交流の場を提供した。
- ・お正月イベントでは、神楽やポスター、ポストカード配布などを行い、来館者増を図った。

評価	理由
A	・企画展やホール事業について、各企画展ごとのターゲットに合わせた広報戦略を行うとともに、SNSも活用した効果的な情報発信が来ている。

評価項目

県内外の他の博物館等と連携した事業の充実により、県民サービスの向上を図る

状況説明

1) 展覧会における連携

- ・志国・高知幕末維新博の地域会場として、コレクション・テーマ展「土陽美術会」、企画展「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」を開催した。
- ・横浜美術館と連携し、同館の優れたフランス美術を紹介する企画展「横浜美術館コレクション 王様の美術館」を開催した。
- ・企画展「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」では、県立文学館での「江戸川乱歩の華麗なる本棚」展とのコラボレーション企画として、相互割引を行った。
- ・コレクション・テーマ展「土陽美術会」では、準備段階の調査の際に県内各施設（県立高知城歴史博物館や佐川町立青山文庫、県立文学館）を訪問し、資料の借用などを通じて連携を深めた。

2) ホール事業における連携

- ・「HOME」では、会場となった香南市赤岡町の街歩きマップのチラシ掲載、商店と連携した関連企画、絵金蔵とのはしご券による割引を行い、地域との連携を深めた。
- ・「雅歌」では、ウーロル・フェスティバル、向井山朋子ファンデーション（オランダ）、一般社団法人マルタス〇+と当館の国際共同製作作品として連携を図った。
- ・地域のギャラリーとの連携企画として、レジデンス事業の経過報告会を開催した。

3) その他連携

- ・県立高知城歴史博物館の修復室を利用して、当館所蔵作品の修復作業を行った。

4) 所蔵作品の貸出

- ・県外では、企画展7件に合計 115 点の貸し出しを行った。
- ・県内では、企画展4件に合計 22 点の貸し出しを行った。

5) 県内外とのネットワーク

- ・県内では、こうちミュージアムネットワーク、明治維新 150 年高知県ミュージアム連絡協議会に参加し、連携を深めた。
- ・県外では、全国美術館会議、日本博物館協会、美術館連絡協議会、公立文化施設協議会、コミュニティシネマセンター、ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク、劇場・音楽堂等連絡協議会、四国美術館会議、四国博物館協議会、中四国地区公立文化施設協会に加盟し、各会議、研究会、研修会への参加を通じて、職員の専門知識の向上を図り、日常業務へ還元する努力をしている。

6) 委員就任等

- ・高知県芸術祭執行委員会、高知市文化財保護審議会、高知市史編さん委員会専門部会の委員を務めた。
- ・赤岡町の絵金祭りに職員を派遣し、作品解説を行った。

7) 市町村やNPOに対する支援

- ・四万十川国際音楽祭や演劇祭 KOCHI、シネマの食堂といった優れた活動を引き続き支援した。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・調査研究、連携体制づくりなど地道な活動を続け、国内外の施設・団体との連携を強化してきた成果を共同企画展や国際共同製作作品として形にし、県民に還元しているとともに、県内外の他施設にも貢献していることが認められる。 ・地域による活動への支援を通じ、県民にその成果を還元することができたと認められる。

要求水準－施設管理

施設及び設備の適切な保守管理をとおして、故障や事故のない運営を行う

評価項目

(1)適切な管理運営の確保	社会的責任	・法令等の遵守 ・個人情報、情報公開の状況
	建物や設備の管理	・点検、修繕の実績 ・業務委託の状況
	危機管理	・風水害、火災、地震、盗難等危機管理対策 ・マニュアルの作成 ・職員研修

状況説明

1)社会的責任

- ・高知県立美術館の設置及び管理に関する条例及び指定管理に関する協定等に基づき、適切な施設の管理運営に努めるとともに、専門業者へ委託した業務に関しても関連法規に沿った施設管理を徹底
- ・平成 30 年度中の美術館に関する開示請求は、なし。
- ・個人情報については、高知県文化財団個人情報保護規定に基づき、収集、利用を適正に行い、利用目的の終了した個人情報は、焼却処分した。
- ・保管の必要のない個人情報は、随時、裁断処理している。
- ・職員のパソコンには、パスワードを設定し、定期的にパスワードを変更するとともに、館外への持ち出しは原則禁止、また、USB 等は自宅に持ち帰らないことを徹底させている。

2)建物や施設の管理

- ・平成 29 年度末から始まったホール及び展示室の吊り天井耐震工事と連動させた改修・更新の年次計画を策定し、計画をもとに、また、日常的に注意深く点検し、経年劣化した設備の更新、危険個所の修繕を迅速かつ効果的に行った。(修繕件数:42 件 3,960 千円)
- ・施設の適切な管理運営のため、専門の技術者等を擁する民間会社に業務を委託した。(委託件数:32 件 75,143 千円)

3)危機管理

- ・館職員で構成する危機管理部会において「危機管理マニュアル」「消防計画」等の改定作業を進めた。管内消防署の指導・助言を得ながら、来館者にも参加いただいて、開館時間中に避難誘導訓練を実施した。
- ・職員通用口等で入館者の出入りを管理し、不審者の侵入を防止した。また、搬入口の2重シャッター(内・外)は、搬入口使用マニュアルに沿って、職員の許可を得て開閉することとし、不審者の侵入防止と、外気、風雨の侵入抑制を図った。

評価	理由
B	職員や委託先などに関係法令が徹底されており、各法令に基づいて、適正な管理運営体制がとられている。

評価項目	
(2) 利用者サービスの維持向上	・利用者の意見の反映 自己点検、評価の状況 ・事故、クレームへの対応 ・職員の専門性の向上 ・研修の実施状況 ・その他サービス向上の取り組み

状況説明
<p>1)利用者の意見の反映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主事業の内容・年間の組み合わせ等は、利用者の多様な意見も勘案しながら、長期的な視点で、総合的、計画的に決定している。 ・施設・設備のハード面での意見等について、緊急性・必要性を検討し、コインロッカーの一部を大型のものに入れ換えたほか、屋根付き駐輪場の増設等を令和元年度に計画している。 ・日常の運営に関するソフト面での意見等については、速やかに組織内で共有し、対応策を協議した。 <p>2)自己点検・評価の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画展やホール事業ごとのアンケート調査に加え、サービス全般のニーズを常時間く据え置き型のアンケートを実施。結果については職員全員で回覧するとともに、必要に応じてレストランや貸館の主催者にも伝達し、改善策を検討。 ・サービス部会を定期的を開催し、日々の業務やアンケート等から得られた利用者のニーズや課題への対策を検討・協議し、館会議や補佐会等に諮りながら実施に移した。 <p>3)事故、クレームへの対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クレーム、要望等については、必要に応じて速やかに対応するとともに、その状況を朝礼等で報告。 ・事故に対しては、管理職に報告・相談しながら、速やかに対応した。 <p>4)職員の専門性の向上・研修の実施状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な機会をとらえて積極的に職員を参加させるとともに、新採職員については、3年計画でOJT研修を進め、資質の向上に努めた。 文化庁ミュージアム・エデュケーター研修(1名)、文化財虫害研究所文化財IPMコーディネーター資格取得講習(1名)、全国劇場・音楽堂等技術職員研修(1名)、全国公立文化施設協会中四国支部業務管理研究会(1名)、中四国地域アートマネジメント研修会(1名)、財団研修(接遇21名、会計2名、学芸員専門8名、自主企画1名) <p>5)その他サービス向上の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主催の展覧会ごとに、受付スタッフをはじめ職員向けのギャラリートークを実施し、職員全体の展示作品や作家に対する知識の習得を図った。 ・Wi-Fi(無料公衆無線LAN)が館内全エリアで安全・快適に利用できるための環境整備を行った。

評価	理由
B	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの要望について、可能な範囲で要望に対応する努力をしている。 ・サービス部会を定期的を開催し、サービスの向上を図るとともに、職員の専門性やスキルアップを図るため外部研修等も活用しながら積極的に取り組んでいる。

評価項目		
(3)利用実績	利用実績の状況	・利用状況の分析

状況説明
<p>1)利用実績の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会観覧者数 34,799 人(常設展 6,317 人、企画展 28,482 人) ・美術館事業の総利用者数 168,971 人 <p>2)利用状況の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・吊り天井改修工事のため、4月1日から9月8日まで美術館ホールを休館した。 ・県からの展覧会観覧者の要求水準「指定管理期間中(H26年度～H30年度)に25万人以上の観覧者を目指す」は、平成29年度中に達成した(H30年度までの累計290,101人)。 ・美術館ホールが休館する影響等も考慮し、館独自の目標として、展覧会事業は年間4万5千人以上、教育普及事業、美術館ホール自主事業、県民ギャラリー等の貸館事業も含めた館事業全体の総利用者数は年間18万人以上を設定して取り組んだが、いずれも達成に至らなかった(達成率:展覧会事業77.3%、事業全体93.9%)。 ・豪雨災害等により夏場の集客が落ち込んだことやホール休館中に利用者への情報発信や展覧会誘導ができなかったことが目標未達成の要因にもなったと考える。 ・新たにスタートさせた高知サマープロジェクトには、関連イベントを含めると1万人近い入場者があり、館活動の裾野を拡げることが出来た。

評価	理由
B	・目標の観覧者数には達しなかったものの、高知サマープロジェクトにより、県内外から小さい子ども連れの家族をはじめ、これまで美術館に足を運ばなかった層が多数来館しており、新しい客層の取り込みにつながっている。

評価項目		
(4)収支の状況	経営努力	・収入増加の取り組み ・経費削減の取り組み

状況説明
<p>1)収入増加の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上質な企画展やホール公演を導入するため、日頃から国内外の美術館やホールをはじめ関係団体や関係者との連携を強化するとともに、見本市や展覧会の視察等も積極的に行い、情報収集に努めている。 ・開催にあたっては、数年に亘って入念に計画・準備し、当館の意向も十分に反映した質の高いものを提供している。 ・広報部会を毎月開催し、広報全般の展開を検証し、改善するとともに、個々の展覧会やホール事業ごとに開催する広報会議などで、それぞれの特徴、特性を活かした広報を検討し、実施した。 ・展覧会を中心に、テレビや新聞の年代層に応じた活用、さらにはフェイスブックやツイッター等SNSによる情報発信を積極的に取り組んでいる。 ・広報の一環として、他の文化施設や企業(とさでん交通(株)等)と連携した利用料の一部減免やタウン誌への招待券提供により、効果的な誘客につなげた。 ・実施する事業の内容の充実を図り、ホール事業を中心に国等から外部資金の獲得を積極的に図った。(文化庁他 計3団体 総額 16,869 千円) <p>2)経費削減の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務スペースでの省エネ・省資源の徹底、また、委託事業者間の空調運転及び照明点灯に関する連絡調整を徹底させ、省エネを進めた。 ・輪転機を活用し、チラシ作製等の印刷経費を圧縮した。 ・県と四国銀行等との協定を活用し、県内外でのチラシ配布経費を圧縮した。 <p>3)収支の状況</p> <p>展覧会の入場者が目標を下回ったことから観覧料が予算額に達しなかったが、助成金が予算額を上回って確保できたことに加え、支出における経費削減等により事業活動収支を均衡させた。</p>

評価	理由
A	・外部資金の積極的な導入など収入源の多様化、安定化を図っており、経費削減の努力が認められる。

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会は、他館と連携した企画展や、館所蔵作品にスポットを当てた展示など、作品の選定や構成が練られている。また、企画展や公演と連動した講演会、ワークショップなどの関連イベントの開催により、多角的、多面的な理解を促進する取り組みが行われている。 ・アーティスト・イン・レジデンス事業では、アーティストと県民の交流を促進することができる。 ・教育普及活動では、スクールプログラムを継続して行っている。 ・ツイッター、フェイスブック、インスタグラムなどのソーシャルメディアも活用して効果的な情報発信が来ている。 <p>上記のとおり、優れた管理運営・事業の遂行がなされたものと認められる。</p>

評価基準

- 「A」 要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされた。
- 「B」 概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされた。
- 「C」 要求水準に達しない面があり、改善のための工夫や努力が必要。
- 「D」 管理運営・事業の遂行が適正に行われたとはいえ、大いに改善を要する。